

読んでみたい この一冊

大阪産業経済リサーチ & デザインセンター
主任研究員 越村 惣次郎

「リープフロッグ 逆転勝ちの経済学」

● 野口悠紀雄 文春新書 990円(税込)



後から追いかけてきた者が、蛙が跳躍するように飛び越えてしまう。それが「リープフロッグ」です。今、世界の経済や産業をみると新興国や発展途上国が、ある日、突然、先進国を飛び越え、世界トップに躍り出る、という現象が散見されています。例えば、中国の躍進はその象徴でしょう。一昔前、中国といえば、安い労働力と安価な量産品のイメージが強かったですが、今ではAIを駆使し、日本を飛び越え、米国と世界トップを争うほどになっています。まさにリープフロッグが起きています。こうした現象は、様々な分野において、ASEANなどほかのアジア諸国でも起こりつつあります。

本書は、今、世界で起こっている現象だけでなく、数百年にわたり移り変わってきた世界の覇権についても、リープフロッグ現象の観点から紐解いていきます。そして最後には、日本経済が再び世界のトップに躍り出るため、リープフロッグを起こす条件を検討します。

本書の構成は次のとおりです。

「第1章 中国急成長の秘密はリープフロッグ」では、近年の中国が、キャッシュレス化やeコマース、FinTech、EVなどにおいて、なぜ先進国を飛び越えることができたかを探っていきます。「第2章 ヨーロッパ最貧国が世界のトップに」では、「ヨーロッパの病人」と呼ばれていたアイルランドが、なぜ、わずかな期間に、支配下にあったイギリスを飛び越え、1人当たりGDPで世界第1位の富裕国になることができたかを解説します。「第3章 世界最先端にいた中国は、リープフロッグされた」、「第4章 リープフロッグが次々に起きた大航海時代」、「第5章 産業革命をリードしたイギリスが、リープフロッグされる」の3つの章では、リープフロッグの視点から歴史を振り返っていきます。人類の歴史において、中国は長らく世界の最先端にありました。紙や火薬、印刷技術など多くの技術は中国で発明されました。しかし明朝時代にとった鎖国政策や徹底した官僚主義のため、中国は世界の

覇権を握り続けることができませんでした。そして株式会社制度などを社会に組み込んだヨーロッパ諸国にリープフロッグされてしまいます。ヨーロッパは、大航海時代、そして産業革命を経て、世界の中心としての地位を確立していきました。その間もリープフロッグは何度も繰り返され、覇権国はポルトガルからスペイン、オランダ、イギリス、そしてアメリカへと移っていきます。著者は、こうして次々と起こったリープフロッグの背景に、「新たな技術」と「挑戦できる環境」という共通点を見出します。続く「第6章 リープフロッグにはビジネスモデルが必要」では、再び舞台を現在に戻し、産業におけるリープフロッグの条件を検討していきます。そしてアメリカのGoogleと中国のアリババを比較し、リープフロッグには新しい技術だけではなく、そこから収益を生み出すためのビジネスモデルが必要であるとの結論を示します。最終章である「第7章 日本は逆転勝ちできるか」では、世界での存在感が薄まりつつある日本が、リープフロッグを起こすための条件を探り、新技術やビジネスモデルに加え、日本の場合には、失敗を許さない社会構造に大きな問題があり、その変革が必要であることを強調しています。

日本は、まだ世界トップクラスの技術を多数保有しています。しかし、著者が指摘するように、その技術を最大限に活かしたビジネスモデルをリスク覚悟で実行する環境や意識が乏しいのかもしれない。本書は、そうした日本の現状の課題を世界と比較することで浮き彫りにし、我々に気付かせてくれる一冊です。

【著者略歴】

野口悠紀雄 (のぐち ゆきお)

1940年生まれ。1963年、東京大学工学部卒業。1964年、大蔵省入省。1972年、エール大学Ph.D.(経済学博士号)取得。一橋大学教授、東京大学教授、スタンフォード大学客員教授、早稲田大学大学院ファイナンス研究科教授など歴任。一橋大学名誉教授。